

鬱屈禍

太宰治

青空文庫

この新聞（帝大新聞）の編輯者へんしゅうしゃは、私の小説が、いつも失敗ばかりで伸び切っていないのを聰明にも見てとつたのに違くない。そうして、この、いじけた、流行しない悪作家に同情を寄せ、「文学の敵、と言つたら大袈裟おおげさだが、最近の文学に就いて、それを毒すると思われるもの、まあ、そういつたようなもの」を書いてみなさいと言つて来たのである。

編輯者の同情に報いる為にも私は、思うところを正直に述べなければならぬ。

こういう言葉がある。「私は、私の仇敵きゆうてきを、ひしと抱擁いたします。息の根を止めて殺してやろう下心。」これは、有名の

詩句なんだそうだが、誰の詩句やら、浅学の私には、わからぬ。どうせ不埒ふらちな、悪文学者の創った詩句にちがいない。ジイドがそれを引用している。ジイドも相当に悪業の深い男のようである。いつまで経っても、なまぐさ坊主だ。ジイドは、その詩句に続けて、彼の意見を附加している。すなわち、「芸術は常に一の拘束の結果であります。芸術が自由であれば、それだけ高く昇騰すると信ずることは、たこ 風のあがるのを阻むのは、その糸だと信ずることでありませぬ。カントの鳩は、自分の翼を束縛する此この空氣が無かつたならば、もつとよく飛べるだろうと思うのですが、これは、自分が飛ぶためには、翼の重さを托たくし得る此の空氣の抵抗が必要だということしを識らぬのです。同様にして、芸術が上昇せんが為

には、矢張り或る抵抗のお蔭かげに頼ることが出来なければなりません。「なんだか、子供だましみたいな論法で、少し結論が早過ぎ、押しつけがましくなったようだ。

けれども、もう少し我慢して彼のお話に耳を傾けてみよう。ジイドの芸術評論は、いいのだよ。やはり世界有数であると私は思っている。小説は、少し下手だね。意あまつて、絃響かずだ。彼は、続けて言う。

「大芸術家とは、束縛に鼓舞され、障害が踏切台となる者であります。伝える所では、ミケランジェロがモオゼの窮屈な姿を考え出したのは、大理石が不足したお蔭だと言います。アイスキュロスは、舞台上で同時に用い得る声の数が限られている事に依て、

そこで止むなく、コオカサスに鎖ぐつなプロメトイスの沈黙を發明し得たのであります。ギリシヤは琴に絃を一本付け加えた者を追放しました。芸術は拘束より生れ、鬪争に生き、自由に死ぬのであります。」

なかなか自信ありげに、単純に断言している。信じなければなるまい。

私の隣の家では、朝から夜中まで、ラジオをかけっぱなしで、甚だ、うるさく、私は、自分の小説の不出来を、そのせいだと思っていたのだが、それは間違いで、此の騒音の障害をこそ私の芸術の名誉ある踏切台としなければならなかったのである。ラジオの騒音は決して文学を毒するものでは無かつたのである。あれ、

これと文学の敵を想定してみるのだが、考えてみると、すべてそれは、芸術を生み、成長させ、昇華させる有難い母体であった。やり切れない話である。なんの不平も言えなくなつた。私は貧しい悪作家であるが、けれども、やはり第一等の道を歩きたい。つねに大芸術家の心構えを、真似でもいいから、持っていたい。大芸術家とは、束縛に鼓舞され、障害を踏切台とする者であります、と祖父のジイドから、やさしく教えさとされ、私も君も共に「い子」になりたくて、はい、などと殊勝げに首肯うなずき、さて立ち上つてみたら、甚だばかばかしい事になつた。自分をぶん殴り、しかりつける人、ことごとくに、「いや、有難うございました。お蔭で私の芸術も鼓舞されました。」とお辞儀をして廻らなければ

ならなくなった。駒下駄で顔を殴られ、その駒下駄を錦の袋に収め、朝夕うやうやくしく礼拝して立身出世したとかいう講談を寄席で聞いて、実にばかばかしく、笑ってしまったことがあったけれど、あれとあんまり違わない。大芸術家になるのもまた、つらいものである。などと茶化してしまえば、折角のジイドの言葉も、ぼろくそになってしまいが、ジイドの言葉は結果論である。後世、傍観者の言葉である。

ミケランジェロだって、その当時は大理石の不足に悲憤痛嘆したのだ。ぶつぶつ不平を言いながらモオゼ像の制作をやっていたのだ。はからずもミケランジェロの天才が、その大理石の不足を償って余りあるものだったので、成功したのだ。いわんや私たち

小才は、ぶん殴られて喜んでいたのじゃ、制作も何も消えて無くなる。

不平は大いに言うがいい。敵には容赦をしてはならぬ。ジイドもちゃんとやっている。「闘争に生き、」と抜からず、ちゃんとやっている。敵は？ ああ、それはラジオじゃ無い！ 原稿料じや無い。批評家じゃ無い。古老の曰く、^{いわ}「心中の敵、最も恐るべし。」私の小説が、まだ下手くそで伸び切らぬのは、私の心中に、やっぱり濁ったものがあるからだ。

青空文庫情報

底本：「もの思う葦」新潮文庫、新潮社

1980（昭和55）年9月25日発行

1998（平成10）年10月15日39刷

入力：蔣龍

校正：今井忠夫

2004年6月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

鬱屈禍

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>